

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 27 日現在

機関番号：84604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720367

研究課題名(和文) 弥生時代の地域間関係と青銅器の受容

研究課題名(英文) Acceptance of inter-regional relations and Bronze materials of the Yayoi period

研究代表者

石橋 茂登 (Ishibashi, Shigeto)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・飛鳥資料館・学芸室長

研究者番号：90311216

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は弥生時代の青銅器を主な分析対象として、日本列島における青銅器の受容と祭祀に関する調査研究を行った。

当初計画に比較すると研究対象と範囲は、時間的制約などの諸条件によって、幾分限られたものとなった。しかしながら、弥生時代の青銅器についての基礎的な整理を行うことができた。それをふまえて、各地の銅鐸埋納の状況を精査して銅鐸埋納地の占地について考察した。また、弥生時代を中心として、飛鳥時代の様相を参考にしつつ、大陸からの文物の受容と型式変化についての考察を行った。これまで知られていなかった、明治時代に初めてアメリカで紹介され、科学分析された銅鐸が現存する個体であることを明らかにすることもできた。

研究成果の概要(英文)：This study is aimed at bronze relic of Yayoi era. And problem of how the Bronze that was accepted in the Japanese archipelago, what rituals I studied the question of whether had been done.

Compared to the original plan, the scope of the study was narrowed. It's caused by various conditions such as time constraints. However, it was possible to carry out the basic arrangement of the bronze relic of Yayoi era. Based on it, about the situation that bronze bell-shaped vessel had been buried, was reviewing the case of Japan. And bronze bell-shaped vessel is I was investigated terrain of place that has been filled. In addition, to investigate the status of the Yayoi period and Asuka period, were studied for the receptor and model changes in the cultural relics from China mainland. In addition, the bronze bell-shaped vessel that has been introduced for the first time the United States in the Meiji era, it was clarified that it is a bronze bell-shaped vessel of Cleveland Museum of Art.

研究分野：考古学

キーワード：考古学 弥生青銅器 銅鐸

1. 研究開始当初の背景

弥生時代においては、鉄も青銅もその原料は大陸から舶載されていた。すなわち漢や朝鮮半島製の文物だけでなく、素材を入手するためには朝鮮半島へと続く遠距離交易ネットワークへ何らかの形で参加することが必要不可欠であった。

高久健二()は朝鮮半島内での漢式遺物と非漢式遺物の差異について、前者は楽浪への朝貢によって個別的に伝播したために本来の使い方や意味と切り離され、威信材としての性格が強くなったのに対して、後者は交易などで体系的な文化として伝播しているという。

同様の見方は日本列島でも可能であると考えられ、その検討を通じて、弥生時代の青銅器がどのような移動の仕方をしているのか、どのような使われ方をしているのか、明らかに出来れば、青銅器の移動の背景や祭祀の受容の様相を明らかに出来ると考えられた。

また、銅鐸については近畿式銅鐸と三遠式銅鐸が対立的に考えられることが多い。しかし静岡県浜松市中川・滝峯では一つの谷筋に両者が埋納されている。従来言われてきたように両者は対立的なのかどうか、検討が必要である。また土器分布圏と銅鐸分布圏を相互に比較することで当時の集団間関係を知る手がかりも得られるであろう。

本研究はこのような理論的見通しを実証すべく、弥生時代の金属器がどのように移動し、受容されているかを研究する。

<引用文献>

高久健二「楽浪郡と三韓」『韓半島考古学論叢』、すずさわ書店、2002、pp.249-280。

2. 研究の目的

本研究は弥生時代の青銅器を主な分析対象として、朝鮮半島から日本にいたる金属製遺物の移動を通じて青銅製祭器の受容の実態を明らかにすることを目的とする。

そのために銅鐸・武器形青銅祭器の使用法というべき埋納方法の実態、大陸からの文物の受容のありかた、また重要な遺物でありながら詳細な検討が行われていない青銅器について、調査と検討を行い、その実態を明らかとする。

3. 研究の方法

(1) 弥生時代の青銅器に関する調査報告書などの情報を収集し、現地踏査と

遺物調査を通じて青銅器の資料化をすすめる。

(2) 弥生時代の青銅器の使用法、とくに銅鐸と武器形青銅祭器は埋納されることが大きな特徴であるので、埋納地と埋納方法について集成と分類を行い、時間的あるいは地域的な要因によって、どのような差異があるのか検討する。

(3) 他の時代を参考として大陸から日本への文物の受容の実態を検討し、それと対比することで弥生時代の青銅器が朝鮮半島からどのように受容され、変化したのかを検討する。

4. 研究成果

(1) 銅鐸埋納地を主として弥生青銅器の出土地について集成と検討を行った。銅鐸出土地の地形や特徴の場合分けを行った結果、銅鐸埋納地には1, 山丘、2, 巨岩の近傍、3, 集落内およびその近傍、4, その他水辺や水中からの出土の類別ができると考えた。墓域からの出土は3のバリエーションといえるが、それは突線鈕1式までにかぎられる。特に巨岩そばの事例には、後世の再埋納が多く含まれていることもわかった(図1)。銅鐸に限らず、青銅器の出土状況に関して論じる場合には個々に注意するしかない。また、従来は丘の麓などとされている事例でも、集落近傍の出土事例があり、集落とその近傍から出土した青銅器は多くあることが改めて認識できた。集落への埋納は従来あまり注目されてこなかったが、今後は注意すべき課題である。

埋納地にはさまざまなバリエーションがあるので、ある一つの目的によって全ての銅鐸埋納を考えるのは無理がある。さまざまな祈りに供されたとみるのが適当であろう。また銅鐸の移動には二つの段階を考えるのが妥当であると考えられる。集団間での供給段階と、じっさいに埋める使用段階である。前者は経済的・社会的背景によって政治的贈り物と



図1 巨岩近傍の銅鐸埋納地(広島県福田)

して銅鐸が運ばれると理解している。後者は、銅鐸を入手した者たちが適所と考える場所に銅鐸を埋めるために運ぶものである。このような理解はこれまで明確に論じられていないところである。成果は論文として発表した。

(2)三遠式銅鐸と近畿式銅鐸が混在して分布する遠江は、型式ごとに受容の差があるのか、あるいはないのか、検討するに良好なフィールドと考えられた。東海地方の文化的まとまりは従来から指摘されており、土器では弥生時代後期の山中式に代表される。三遠式銅鐸の分布圏もほぼ重複することから、三遠式銅鐸は東海地方の勢力と関わりが深い。一方の近畿式は近畿地方を中心として分布する。三遠式、近畿式ともに遠江が主たる分布圏の東端となる。三遠式と近畿式は対立的に捉える見解が多いが、浜松市の銅鐸の谷とも呼ばれる中川・滝峯では、ひとつの谷筋に近畿式と三遠式銅鐸の双方が埋納されている。ここから近畿式銅鐸と三遠式銅鐸は強い排他関係にあるのではなく、共存できるものだとわかる。滋賀県大岩山でも両者は一括埋納されている。

それぞれが近畿、東海のどこかから運ばれてくるのであれば、土器なども一緒に移動していると考えるのが自然である。土器の分布と銅鐸の分布は相関性が認められ、天竜川がほぼ境となり、三河の影響が強い土器分布圏と銅鐸の東限はほぼ重なっている。それより東では土器様相が大きく異なるが、まったく交流がないわけではない。銅鐸もほとんど見られないが、東へ向けて関東地方の小銅鐸がみられるように、小型化という形態変化や副葬という使い方の変化を見せつつも銅鐸が伝播して受容されている。

そして近畿式が遠江に多くみられるのは、伊勢湾岸を横断する伊勢から渥美半島を経るルートによる東への交通路が大きく関わっているだろう。近畿式銅鐸が畿内からもたらされる経路は大和から伊賀を経て伊勢から海を渡り、三河に至る道も考えられる。伊賀で遠江からの搬入品が、伊勢で畿内色の強い土器の存在が報告されている事例はその傍証となろう。これらは土器や銅鐸が移動し受容されていく姿の一端を示している。これらの成果を論文として発表した。

(3)比較的文献史料や考古資料が多く知られている飛鳥藤原地域における日本と朝鮮半島の文物の受容の仕方を参考に、弥生時代の朝鮮半島と日本の大陸文物の受容を検討し、青銅器の性格につ

いて考察を加えた。

土器の形態や文様の変化には自律的变化と他からの影響を受けての変化があろう。日本列島における大陸産文物の流入と、その影響を受けて国産品が変化する現象は、弥生時代もその後の時代も共通する部分がある。またその背後には外交関係の変化であるとか、異文化からの影響も考えられる。そこで飛鳥時代の飛鳥・藤原地域の外国産土器と国産品への影響を調べた。飛鳥・藤原地域では朝鮮半島の陶質土器・陶器、鉛釉陶器、中国産の三彩陶器がみられる。これらは寺院、官衙、宮殿から主として出土する。舶載品に混じって、藤原京出土の緑釉獣脚硯は舶載品の意匠を取り入れた国産品とされる。また飛鳥池工房では緑釉を製作しようとして失敗したのが見つかり、隋唐の壺の影響が形態に看取されると指摘されている。飛鳥時代には朝鮮半島産のものが多く、奈良時代には中国産のものが多くなる。これは外交関係の頻度や経路、すなわち飛鳥時代の遣隋唐使が朝鮮半島経由であったこと、遣唐使の中断以後も遣新羅使が盛んに発出されたこと、奈良時代以降に再開された遣唐使は朝鮮半島を経由しない経路であったことなどが背景となって出土遺物の物量に反映されていると考えられる。

翻って弥生時代の青銅器を検討してみると、当時、中国との直接の往来はほとんど無かったと考えられる。漢の文物を倭が受容するにあたっては朝鮮半島がフィルターのように影響を与えたであろう。朝鮮半島においては、上層階層が楽浪への朝貢によって漢式遺物を個別的に受容したため体系的ではない威信材となっており、下位階層は交易などで入手した非韓式遺物を体系的に受容しているとされる。楽浪と韓の文化的関係は、韓と倭の関係と似ていると考えられる。倭から楽浪郡への朝貢によってもたらされた銅鏡が、中国や朝鮮半島と違う副葬のされ方をするのは、非体系的な威信材としての受容の例といえよう。朝鮮半島の青銅器である武器形青銅器や小銅鐸が倭にもたらされた際にも、体系的な使用方法が日本列島に伝播せず、威信材として持ち込まれた結果、大型化や埋納儀礼の発達といった、本来の用途とはことなる受容をされることとなったのであろう。朝鮮半島の各種の青銅器は、日本列島に受容される過程で器種の脱落、使い方と形態の変化が起こっている。また日本列島から朝鮮半島へ運ばれた

武器形青銅器は、日本式の埋納ではなく、彼の地での使い方、副葬品として使われている。このことから、使い方は倭が決めるのではなく、受け手である韓が決めていることがわかる。倭製青銅器は倭がおしつけるような性質のものではなく、良好な関係を期待して倭が韓へ贈るものだという理解を裏付けるだろう。このような分析が妥当であれば、日本列島内における武器形青銅器や銅鐸の移動も、同様な論理に基づいているとみるべきである。また、朝鮮半島南部にみられる倭製青銅器は武器形青銅器に限られ、銅鐸がない。銅鐸の原材料に大陸産の鉛が含まれているとされているが、このことは、近畿地方の集団は北部九州を介してのみ朝鮮半島との交易ができたということであり、近畿地方から朝鮮半島に直接交通することはできなかったと推測できる。これらの成果は論文として発表した。

(4) 突線鈕式銅鐸における、近畿式と三遠式の型式および分布の差は、これまでも論じられてきたものの、三遠式銅鐸の大型化は従来あまり注目されてこなかった。しかし総高 100 cm 近い個体が知られており、三遠式に鈕の飾り耳がないことを考えれば、総高において比肩する近畿式銅鐸は、突線鈕 3 式ではなく、もっと新しい型式に限られる。このことを考えるうえで鍵となる銅鐸が米国クリーブランド美術館所蔵銅鐸である。この銅鐸は総高 97.8cm を測る三遠式銅鐸最大の個体である。明治時代に H = S = マンローが図示した銅鐸と、この銅鐸の実物を観察して比較したところ、鈕の鑄造不良箇所や、文様の数、内縁文様帯にひとつだけある鋸歯文といった特徴がことごとく一致した(図 2)。その結果、消息が知られていなかったマンローが報告した銅鐸と同一個体であると判断できる。この銅鐸はアメリカで最初に報告された銅鐸であるとともに、最初に科学分析された点でも学史上重要な個体である。三遠式銅鐸にみられる古い特徴は、近畿式銅鐸との共通の祖型からわかれた分岐点の名残だが、では三遠式が 100 cm まで大型化している現象をどう考えるか。従来の型式分類では三遠式は突線鈕 3 式並行とされてきたが、そうであるならば数は少ないとは言え、大型の三遠式銅鐸が近畿式を遙かに凌駕する大型化を先行していることになる。現時点では新しい分類と平行関係を提示するには至らないが、この銅鐸は近畿式銅鐸と三遠式銅鐸の関係を考える上で手が



図 2 クリーブランド(左)とマンローの銅鐸

かりとなる個体であり、それは当時の社会情勢や青銅器祭祀の変化を考える上でも重要な資料であろう。成果は論文としてまとめた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

石橋茂登「H = S = マンローの銅鐸」『型式論の実践的研究』, 査読無, pp. 83-87, 2015, 千葉大学大学院人文社会科学研究科

石橋茂登「大陸文物の受容と型式的変化をめぐる考察」『型式論の実践的研究』, 査読無, pp. 133-139, 2014, 千葉大学大学院人文社会科学研究科

石橋茂登「遠江の土器と銅鐸(予察)」『型式論の実践的研究』, 査読無, pp. 57-63, 2013, 千葉大学大学院人文社会科学研究科

石橋茂登「銅鐸埋納地の占地について」『文化財論叢』, 査読無, pp. 87-110, 2012, 奈良文化財研究所

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石橋 茂登 (ISHIBASHI, Shigeto)
独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 飛鳥資料館 学芸室長
研究者番号: 90311216